

立命館大学大学院
2017年度実施 入学試験

博士課程前期課程

政策科学研究科
政策科学専攻

| 入試方式 | 実施月 | 小論文 | |
|--------------------|-------------------|------|----|
| | | ページ | 備考 |
| 一般入学試験 | 7月 (2017年9月入学) | | |
| | 7月 | P.1～ | |
| | 9月 | P.3～ | |
| | 2月 | P.5～ | |
| 外国人留学生入試 (海外推薦) | 7月 (2017年9月入学) | | |
| | 9月 | | |
| | 1月 | | |
| | 2月 (2018年9月入学) | | |
| 学内進学入学試験 | 7月 (2017年9月入学) | | |
| | 7月 | | |
| | 9月 | | |
| | 2月 | | |

立命館大学大学院
2017年度実施 入学試験

博士課程後期課程

政策科学研究科
政策科学専攻

| 入試方式 | 実施月 | 試験科目 (1科目を選択) | ページ | 備考 |
|----------------------|-------------------|---------------------|------|----|
| 一般入学試験 | 7月 (2017年9月入学) | 筆記試験(論文) | | |
| 一般入学試験 | 2月 | 日本語 (外国人留学生) | P.7~ | |
| | | 英語 (外国人留学生以外) | | |
| | | ドイツ語 (外国人留学生以外) | | |
| | | フランス語 (外国人留学生以外) | | |
| | | 中国語 (外国人留学生以外) | | |
| 外国人留学生入学試験 (海外推薦) | 7月 (2017年9月入学) | | | |
| | 2月 (2018年9月入学) | | | |

2017年度大学院入学試験〈2017年7月8日実施〉

政策科学研究科前期課程 入学試験問題

小論文（筆記）試験

〈一般入試〉

試験時間 10時30分 ～ 11時10分
(途中退室はできません)

- ・ 持ち込み許可物件はありません。
- ・ 問題は試験終了後に回収します。

問 以下の社説を参考にしながら、地球環境問題について意見を述べよ。

米離脱によるパリ協定の形骸化を防げ

トランプ米大統領が温暖化対策の国際枠組み「パリ協定」からの離脱を表明した。協定は温暖化ガスの2大排出国の中国、米国を含め「全員参加型」である点が重要だった。米国が抜けたことで途上国などが削減意欲を失い、協定が形骸化する事態は避けたい。

トランプ氏は米国の利益にかなうような協定の見直しに言及したが、具体策はなく現実味に欠ける。温暖化がさらに進めば、海面上昇による浸水や異常気象の多発などリスクは高まる。

大切なのは日本など他の協定参加国が温暖化ガスを目標通り着実に削減し、米国に追随して脱退する国が出ないようにすることだ。

パリ協定は2016年11月に発効した。規定では発効から4年を経た20年11月まで離脱できない。しかし米国は手続きの完了を待たずに、温暖化ガス排出を25年までに05年比で26～28%減らす目標を放棄し、途上国支援も打ち切る。

米国はパリ協定の親条約「気候変動枠組み条約」の事務局費用の2割程度を受け持つ。途上国支援の基金も30億ドル（約3300億円）の分担を約束していた。

途上国は支援と引き換えにパリ協定に合意した経緯があり、米国の方針転換を受けて温暖化ガスの削減努力をやめる国が出かねない。日本や欧州は技術供与などに力を入れ、これを食い止めなければならない。

パリ協定では18年までに温暖化ガス排出量の測定や報告の詳細ルールを決める予定で、米国の役割が期待されていた。日本は中国や欧州などと協力し、透明性の高い公正なルールづくりを主導して着実に削減を進めるべきだ。

トランプ氏はパリ協定に基づく環境規制が雇用を奪い、経済を縮小させると主張する。しかし、それは間違いであることを各国の実績をもとに示す必要がある。

温暖化ガスの排出を減らす革新的な製造・物流技術や新エネ技術は新たな産業や雇用の創出につながる。米経済の重要な担い手であるIT（情報技術）やエネルギー業界はそれに気付き、パリ協定からの離脱に異を唱えてきた。

カリフォルニア州は厳しい独自規制を続けつつ、環境関連の産業育成に力を入れている。こうした動きを後押しし、将来の米国のパリ協定復帰への扉は閉ざさないようにしたい。協定離脱は外交上の地位や国際的な信頼の低下を招いたことも認識させるべきだ。

（日本経済新聞 2017年6月3日 社説）

2017年度大学院入学試験<2017年9月9日実施>

政策科学研究科前期課程 入学試験問題

筆記(小論文)試験

<一般入試>

試験時間 10時30分 ~ 11時10分
(途中退室はできません)

- ・ 持ち込み許可物件はありません。
- ・ 問題は試験終了後に回収します。

論題：以下の社説を参考にしながら、次世代自動車に関する政策について意見を述べよ。

（社説）自動車の未来 試される変革への対応

自動車が「100年に一度」とも言われる大変革の時代を迎えようとしている。

ガソリンなどを燃料とし、20世紀に入って普及したエンジン車への規制を強める動きが世界で広がり、電気自動車（EV）が次世代エコカーの本命候補になりつつある。自動運転の技術も急速に進化し、遠くない将来、操作がほとんどいらぬクルマが登場するかもしれない。

自動車は暮らしを支え、その産業は日本経済の屋台骨だけに、社会に大きな変化が生じそうだ。企業など民間が競争を通じて創意工夫を重ね、行政はインフラやルールの整備で後押しするという基本を忘れずに、向き合っていきたい。

世界的な「EVシフト」の背景にあるのは、地球温暖化対策への意識の高まりだ。米国の一部の州や中国がEVなどのエコカーを普及させる政策を進めていたが、英仏が新たに2040年までにエンジン車の販売を禁止する方針を打ち出した。

電池の性能向上やコスト低下といった技術革新が後押しする。EVではベンチャー企業の米テスラが台頭し、世界の主要メーカーも本格投入を急ぐ構えで、エンジンからモーターへの移行が加速しようとしている。

一方、自動運転では業種を超えた開発競争が激しい。カギを握る人工知能（AI）や情報通信の技術を武器に、米国のグーグルやアップルなどが参入し、自動車産業に挑む構図だ。

二つの波は、とりわけ日本の自動車業界に強く自己改革を迫っている。燃費の良さや価格の手ごろさ、総合的な技術力で国際競争を生き抜いてきたが、今後はこうした強みを発揮しにくくなるからだ。

EV分野などでマツダと提携したトヨタ自動車の豊田章男社長は「海図のない、前例のない戦いが始まっている」と語った。国内AIベンチャーへの多額の出資も発表し、自前主義へのこだわりを捨てて異業種との連携を急ぐ。ホンダがグーグル系企業と完全自動運転の共同研究で合意するなど、国境をまたぐ動きも広がる。

一方、個別企業では対応しきれない課題もある。EVや充電設備の普及は当面、補助金など政策支援がカギになる。完全自動運転の実用化には安全に関するルールづくりが不可欠だ。自動車をめぐる環境規制の見直しもいずれ課題になるだろう。

どんな製品が主流になるかを最後に決めるのは消費者だ。その利益を守りつつ、社会が望ましい方向に向かうよう環境を整えることが行政の役割である。

（朝日新聞 2017年8月20日 朝刊 オピニオン面）

2018 年度大学院入学試験<2018 年 2 月 10 日実施>

政策科学研究科前期課程 入学試験問題

筆記(小論文)試験

<一般入試>

試験時間 10 時 30 分 ~ 11 時 10 分
(途中退室はできません)

- ・ 持ち込み許可物件はありません。
- ・ 問題は試験終了後に回収します。

論題： 以下の新聞社説を参考にしながら、保育・教育の無償化について意見を述べよ。

保育・教育無償化は所得制限が前提だ

安倍晋三首相が衆院選で公約した保育・教育の無償化について、政府内の制度設計が大詰めを迎えた。国の財政が逼迫しているなかで財源に2兆円を計上する総額ありきの決定を危惧する。無償にするのは税による支援を真に必要とする低所得世帯に限るべきだ。

2019年10月に消費税率を10%に引き上げるのに伴う国の増収分のうち、首相は1兆7千億円を無償化の財源に充てる。産業界には3千億円の拠出を求め、人づくり革命と称する2兆円規模の総合対策をつくる。

2歳児までの保育料と大学授業料の無償化は低所得世帯に限る。問題は3～5歳児だ。世帯年収に関係なく8千億円をかけて保育園・幼稚園を原則ただにする。

児童福祉法の基準を満たした認可保育所の場合、年収およそ1130万円以上の世帯が払う保育料は月3万～5万円が多い。このような世帯を保育料を免除している生活保護世帯と同じ扱いにするのは説明がつかない。

幼稚園は授業料が高額な一部の私立園以外を無償にする。保育園であれ幼稚園であれ、提供する保育・教育内容の善しあしにかかわらず税で補助金を配れば、経営規律を損なうだろう。

消費税財源を育児支援に充てるなら、もっと有効に使うべきだ。認可・認可外を問わず質の高い保育施設と人材に投資し、育児のために仕事を離れたり就労をあきらめたりする人を減らすのが、まっとうな使い道である。

質の高い保育を提供する認可外施設が認可施設に比べて不利にならないような税制面の改革も課題だ。保育士・介護士の基礎的資格の共通化など規制改革でもすべきことは少なくない。

また産業界は3千億円を出しっ放しにするのではなく、政府が待機児童対策などに有効に使うかどうか、きちんと監視すべきだ。

18年度の国の予算編成で、財務省は高齢化で増える社会保障費を6300億円から5千億円に圧縮する方針だが、四苦八苦しているのが実情だ。保育・教育の重要性は論をまたない。政権が重点政策にするのは理解できるが、2兆円もの巨費をばらまくのでは社会保障費の圧縮に逆行する。

公的サービスをいったん無償にすると、その後に少しの負担を求めるのにいかに苦勞するかは、後期高齢者医療の事例が物語っている。それを思い起こすべきだ。

(出典) 2017年11月15日付日本経済新聞朝刊

2018 年度大学院入学試験＜2018 年 2 月 10 日実施＞

政策科学研究科後期課程 入学試験問題

外国語(英語)試験

＜一般入試＞

試験時間 10 時 00 分 ～ 11 時 30 分
(途中退室はできません)

- ・ 持ち込み許可物件は、一般的な外国語辞書(当該外国語の和訳辞書)です。但し、専門語辞典、辞書機能付き電子手帳等は認めません。
- ・ 問題は試験終了後に回収します。

以下の[A]、[B]ふたつの文を読み、問いに答えよ。

[A]

In the spring of 1899 William Miller persuaded three members of his Brooklyn prayer group to invest their money with him, promising them unearthly returns. He would pay a dividend of 10% per week, plus a commission for each new investor they could recruit. Soon, William “520%” Miller was drawing throngs of depositors to his door. So “great was the crush”, by one account, his staircase eventually gave way. Miller attributed his success to “inside information”. But his real method was made famous 20 years later by the man who perfected it, Charles Ponzi.

Ponzi schemes like Miller’s pay a return to early investors with money raised from later ones. When they run short of new contributions, they collapse. A scheme as generous as Miller’s cannot last long. But what if the promises were less extravagant and the repayment intervals less tight? What if, for example, a scheme asked investors for money in their younger years in return for a payout in their dotage? Over that time scale, a Ponzi scheme need not limit its recruitment efforts to the people alive when it begins. It can repay today’s contributors with money from future participants not yet born. And since the next generation is never likely to be the last, the chain could, in principle, continue indefinitely. Barring a catastrophe, new marks will be born every day.

This intergenerational logic lies behind the “pay-as-you-go” (PAYG) pensions common in many countries. People contribute to the scheme during their working lives, and receive a payout in retirement. Many people fondly imagine that their contributions are saved or invested on their behalf, until they reach pensionable age. But that is not the case. The contributions of today’s workers pay the pensions of today’s retirees. [a] The money is transferred between generations, not across time.

America’s Social Security, for example, is largely pay-as-you-go. [b] For this reason, its critics often compare it to a Ponzi scheme in order to discredit it. But the comparison can also work the other way. If Social Security—a venerable entitlement that has spared millions from penury—bears some resemblance to a Ponzi scheme, then perhaps Ponzi principles are not always as diabolical as the name suggests.

In some cases, those principles might indeed redound to everyone’s benefit. One such scenario was sketched by Paul Samuelson of the Massachusetts Institute of Technology in 1958. His thought experiment is easiest to understand when recast as an island parable. The island in this parable is home to unusually tall cacao trees, hungry people, and little else. Only the young can climb the trees and pick the fruit, which must be eaten quickly before it spoils in the hot sun. And only two generations (young and old) are alive at the same time.

On such an island, the elderly have no way to provide for themselves. They are physically incapable of picking fruit. They cannot buy fruit from the young,

because they have nothing to offer in exchange. Nor can they live off any cacao pods saved from their youth, because their stockpile will have rotted by the time they are old. There are no durable, imperishable assets that might serve as a vehicle for their thrift.

The solution, of course, is an intergenerational Ponzi scheme. The young give fruit to the old on the understanding that the next generation will do the same for them when they grow frail. In effect, the young lend to their parents and collect repayment from their children. In so doing, they serve as a link between two generations that never otherwise coexist.

[c] The scheme works, Samuelson pointed out, only because “new generations are always coming along”. If reproduction were ever to cease, the last generation would get nothing out of the scheme. Knowing this, they would not put anything in. But their failure to contribute would also deprive the penultimate generation of a payout, leaving them no reason to take part either. Any anticipated future break in the chain causes the whole thing to uncouple. If the scheme must ever end, it cannot even start.

William Miller’s proto-Ponzi scheme lasted less than a year. His banks closed his accounts and newspapers hounded him. He fled to Canada before the police eventually caught up with him. But he never actually ran out of investors. Even as he was escaping the country, envelopes addressed to his syndicate piled up at the post office, filled with contributions from the next generation of believers.

- 問1. 下線部 (a) で述べられている金銭の二つの移転方式は具体的に何を指すか。また、この場合なぜ後者ではなく前者なのか。日本語で答えよ。
- 問2. Ponzi 流の方法は、日本語で何と呼ばれるか。本文の説明を読んで推量せよ。
- 問3. 下線部 (b) はどのように社会保障制度を批判しようとするのか説明せよ。
- 問4. 下線部 (c) を和訳せよ。

【出典】

Kicking the can down an endless road, The Economist, Aug 31, 2017.

Reproduced with permission of The Economist Group Limited. (一部改変)

(B)

We live in a world of unprecedented opulence, of a kind that would have been hard even to imagine a century or two ago. There have also been remarkable changes beyond the economic sphere. The twentieth century has established democratic and participatory governance as the preeminent model of political organization. Concepts of human rights and political liberty are now very much a part of the prevailing rhetoric. People live much longer, on the average, than ever before. Also, the different regions of the globe are now more closely linked than they have ever been. This is so not only in the fields of trade, commerce and communication, but also in terms of interactive ideas and ideals.

And yet we also live in a world with remarkable deprivation, destitution and oppression. There are many new problems as well as old ones, including persistence of poverty and unfulfilled elementary needs, occurrence of famines and widespread hunger, violation of elementary political freedoms as well as of basic liberties, extensive neglect of the interests and agency of women, and worsening threats to our environment and to the sustainability of our economic and social lives. Many of these deprivations can be observed, in one form or another, in rich countries as well as poor ones.

Overcoming these problems is a central part of the exercise of development. We have to recognize, it is argued here, the role of freedoms of different kinds in countering these afflictions. Indeed, individual agency is, ultimately, central to addressing (d) these deprivations. On the other hand, the freedom of agency that we individually have is inescapably qualified and constrained by the social, political and economic opportunities that are available to us. There is a deep complementarity between individual agency and social arrangements. It is important to give simultaneous recognition to the centrality of individual freedom and to the force of social influences on the extent and reach of individual freedom. To counter the problems that we face, we have to see individual freedom as a social commitment. This is the basic approach that this work tries to explore and examine

(e) Expansion of freedom is viewed, in this approach, both as the primary end and as the principal means of development. Development consists of the removal of various types of unfreedoms that leave people with little choice and little opportunity of exercising their reasoned agency. The removal of substantial unfreedoms, it is argued here, is constitutive of development. However, for a fuller understanding of the connection between development and freedom we have to go beyond that basic recognition (crucial as it is). (f) The intrinsic importance of human freedom, in general, as the preeminent objective of development is strongly supplemented by the instrumental effectiveness of freedoms of particular kinds to promote freedoms of other kinds. The linkages between different types of freedoms are empirical and causal, rather than constitutive and compositional. For example, there is strong evidence that economic and political freedoms help to reinforce one another, rather than being hostile

to one another (as they are sometimes taken to be). Similarly, social opportunities of education and health care, which may require public action, complement individual opportunities of economic and political participation and also help to foster our own initiatives in overcoming our respective deprivations. If the point of departure of the approach lies in the identification of freedom as the main object of development, the reach of the policy analysis lies in establishing the empirical linkages that make the viewpoint of freedom coherent and cogent as the guiding perspective of the process of development

問5.下線部 (d) の deprivation の例を日本語または英語で2つ挙げよ。

問6.下線部 (e) を和訳せよ。

問7.下線部 (f) を和訳せよ。

問8.下線部 (f) の supplement とはどのような作用か、具体例を挙げて説明せよ。

【出典】

Amartya Sen, *Development as Freedom*, pp. xi-xii, copyright © 1999 by Amartya Sen.
Reproduced with permission of the author.